

《研究ノート》

エドワード・ハーバート『自叙伝』（翻訳）

—— (2) 「幼年期から思春期、
そして通常教育に関する所見(前編)」 ——

山根正弘 訳

[訳者による前口上] 十七世紀イギリスの外交官にして詩人および哲学者・歴史家エドワード・ハーバート（チャーベリーのハーバート卿）による自叙伝の続き。一五八三年にシュロップシア州はアイトンの地で産声を上げた著者が、病弱な幼少期を過ごした後、家庭教師の助けを借り十三歳でオクスフォード大学のユニヴァーシティ・コレッジに入学。在籍してほどなく厳父の訃報に接し、十六歳で結婚。お膳立てられた同族婚とはいえ、五歳年上の姉女房をもらう羽目となった。過去に受けた教育を回顧する中で、自伝に付き物である意見の開陳として、教育方針が挿入される。一見すると、一族の末裔に向けた家訓の披瀝のようだが、当時の時代背景に照らすと、つまり十六世紀の終わりから十七世紀の半ばにかけて貴族やジェントリー階級の子弟が大挙して大学に押し寄せ、教育改革が声高に要求され大きな変革をもたらされた状況を踏まえると、実は当時の教育制度に一石を投じる意見陳述であると分かる。現在日本の大学も同様に、教育改革が叫ばれて久しいが、確たる指針を探る上で、ハーバート卿による教育論の精神が参考となれば望外の喜びである。

訳文中、諸々の括弧の使い方は、前号に準じる。ただ今回は、翻訳の底本にはない箇所が異本に見られるため、異本より補い { } で示した。また、傍点や圏点の使い方について、フランス語やイタリア語などの外国語は、ラテン語の「」表記と区別するため親文字の上に傍点（` `）を施し、訳者が強調したい箇所には親文字の上に圏点（´´´）を付けた。

なお、訳者が施した注の番号については、前号より続く連番である。

前述の耳垂れのことは今でも憶えている。耳から膿^{うみ}がとても激しく流れ出し、親族の者はアルファベットを教えるまでもないと考えていた。七歳になってようやく膿の滲出が止み、ご先祖様も患っていた例の病、癲癇から解放された。その時から先述のアイトンにある祖母の館で、住み込みの家庭教師にアルファベットを習い始め、次に文法そして学校の共通読本へと進んだ。読本から得る知識は多く、{二年後にはある程度のラテン語を覚え}[運命の女神は勇者を助ける]⁽⁸⁾ というテーマのもと、紙一枚分、韻文にして五、六十行、しかも一日で弁論を仕上げた。また、自分よりも年長の学友ふたりと取っ組み合いの喧嘩をして、{さらには他の悪童に悪戯をして} 時に叱られたこともよく憶えている。しかし、嘘をつくとか、その他の過ちを犯したことは一切ない。生来の気質や性癖から虚偽とは無縁^{ためら}の存在であったため、疑われても致し方ない過失を白状しろと迫られると、何の躊躇^{ためら}もなく罪を認めたし、嘘について精神

に汚点を残すよりは折檻^{せつかん}される方を選んだ。というのも、嘘つきの汚名は時を経ても雪^{そそ}げないと思っていたからだ。世間の人すべてに心の底から誓って言える、生まれてこの方、我が魂は生まれながらにして虚偽と欺瞞に反感と嫌悪を抱き、嘘偽り^{うそいつわ}を故意に語ったことは一度もない。九歳になったとき、その時までアイトンにある先述の祖母の館に暮らしていたが、両親の考えでウェールズ語の勉強ができる場所に遣られた。それ以外の言葉を話せない親類や借地人との交渉に欠かせないと判断したからだ。デンビーシア州〔ウェールズ北東部〕はブレイス・ウォードのエドワード・セルウォル氏に白羽の矢が立った。この尊敬して止まない先生はギリシア語やラテン語、フランス語やイタリア語それにスペイン語の精確な知識とその他の学問すべてを身に付けていたが、それでいて語学習得を目的とした渡航経験もなく、大学教育の恩恵に浴することすらなかった。その上、怒りの感情を抑えられる希有な気質の持ち主で、長年にわたり恩師のことはいろいろと聞いて知っているが、師の邸宅に滞在中も、何かに腹を立てるのを一度たりとも見たことがない。ある時たまたま激昂しそうになったが、頬が紅潮するのを見ただけで、しばしの沈黙のあと、語り口は優しく穏やかで、激情を押し殺しているのがよく判った。だが包み隠さずに言うと、私はとても恩師の域に達することはできない。というのも、普通の人より気性が激しく癩癩^{たぢ}持ちで、たいてい思ったことは率直に口に出す質であるから。つまり、屋内で火を焚き付けて火事になるよりは、焰に出口を与える人物を見習うから〔怒りに火が点いたとき身体の中で爆発させるより、火種そのものを吐き出すから〕。けれど、セルウォル氏のやり方をとても推奨する。なるほど、しばらく口を噤むことができる人は激情を和らげられるであろう。だが、この種のことで恩師から多くを学べなかった。師の邸宅に九ヵ月も長きにわたり寄宿していたものの、その間の大半、三日ごとに瘡^{おこり}に襲われたからだ。そのため同様に、ウェールズ語や立派なジェントルマンが理解する他の言語を学び益することがほとんどなかった。

十歳になった頃、元気を取り戻したので、シュロップシア州はデイドルベリーのニュートンという人物に教えを請うため、氏の許に預けられた。二年も経たない内に、病気で遅れた分を取り戻しただけではなく、ギリシア語と論理学の知識を得た。それも十二歳のとき、両親がオクスフォード大学のユニヴァーシティ・コレッジに入れてもよいと思うほど成長した〔実際に入学したのは、一五九六年、十三歳のとき〕。大学に入ってはじめて論理的に論争をしたこと、課題の問題をラテン語よりも頻繁にギリシア語でこなしたことを憶えている。大学に入って何ヵ月もしない内に、厳父の訃報が届いた。病名は目を開けたまま眠る「開眼昏睡」で、長らく続いていた。その昏睡病で、本人の気は確かだったが、あまり痛みを訴えることもなくやがて死ぬらしい。医者^{おこり}の診断では父の病は致命的で、私は母から即刻実家に戻るようにと促された。そして父が死ぬとすぐ、伯父のサー・フランシス・ニューポートも、私の後見人

となるべく急いでロンドンに向かうように頼まれた。伯父と母との共益のため、ぜひとも必要だったらしい。実際、伯父は私の後見権を得た⁽⁹⁾。その直後、学問のためオクスフォードに戻ったが、ほどなくサン・ジュリアンのサー・ウィリアム・ハーバートの世嗣の娘〔メアリー〕との縁談が持ち上がった。その経緯はこうだ。このサー・ウィリアム・ハーバートは先に紹介したペンブルック伯の次三男の子孫で世嗣だが(前にも述べたように〔城西大学語学教育センター『研究年報』(二〇一九年三月)第11号、九九頁〕、例のペンブルック伯の長男には長女がいて、その娘〔エリザベス〕はウスター伯が現在モンマスシア州に所有する莫大な財産を掠め取った)、そのサー・ウィリアムは、存命のひとり娘のため遺言を作成した。それによると、ハーバートの家名を持つ者と結婚するという条件付きで、モンマスシア州とアイルランドに有するすべての財産をそのひとり娘に遺す、そうでなければそれらの財産はペンブルック伯の男の世嗣に継がせ、自身の娘にはアングルシー島とカーナヴォンシア州にある、猫の額ほどの地所を継がせるという。このように遺産に決着が付くと、そのあとすぐ、サー・ウィリアムは鬼籍に入った。岳父サー・ウィリアムは書物にかなり精通し、特に神学に生涯を捧げた。それも黙示録に釈義を施し出版したほどだ。けれど、もうひとつの分野、錬金術で賢者の石を手に入れられず、同様に神学でも奥義を見つけないには至らなかったと考える者もいる。しかしながら、義父は万事に通暁し、高貴な精神の持ち主として知られる。だが、義父とは面識がないばかりか、他の点では義父に関するさらなる情報もなく、義父の話はこの程度で終わる。サー・ウィリアムの世嗣の娘はメアリーと言い、父親の死後、二十一歳になるまで独身であった。その間、年齢と財産の点で嫁ぐのに相応しい人物がハーバート一族にいなかったとみえる⁽¹⁰⁾。この頃、私は十五〔十六〕歳で、縁談が整い年齢差にもかかわらず、一五九九年二月二十八日にアイトンの館で挙式が執り行なわれた。式を司ったのは、両親に夫婦の契りを結ばせるとともに私に洗礼を施した、あの〔ロクシター〔シュルーズベリー近郊の村〕の〕某副牧師だった。結婚後ほどなく、妻と母とを連れ立ちオクスフォードに戻った。母が家を借り、しばらく一緒に暮らした⁽¹¹⁾。さて、若者ならだれしも陥る欲望を満足させる正当な治療薬を手に入れ、これまでも増して書物に勤しむようになった。その間にほぼ十八歳になり、それを機に母がロンドンに家を借りた。その借家とモントゴメリー城を行き来して時を過ごしている内に二十一歳になった。その間に何人か子供を授かった。今も存命なのは、ベアトリス、リチャードそしてエドワードである。大学か借家で暮らしている間に、フランス語やイタリア語それにスペイン語に関して、語学の教師や師範に頼らず、それら当代の言語の知識を得た。各国語に訳されたラテン語や英語の書物、それに数種類の辞書の助けを借りてだが。また音楽では、教わることがほとんどあるいはまったくなしに、初見で自分の声部を歌えるばかりか、リュートも奏でられる。言葉を学ぶ目的は、真の世界市民に近づくこと

である。音楽を習う目的は、家にいる時に気分を爽快にし、学問に傾倒し疲れたあと英気を養い、さらには同じ若者たちと群れる必要がなくなる、という点にある。というのも私の観察によると、当代の若者は酒色にふける悪例となっているから。

このようにしてようやく成年〔二十一歳〕に達したので、生まれてから大学を出るに至るまで、通常教育について所見を述べよう⁽¹²⁾。また、生涯の話とともに子孫に役立つと思われる家訓をも開陳したい。はじめに思うことは、両方の家系に見られる遺伝的な病は幼少の頃に治すべきであると。それで、もし石や砂が生じやすい質なら、乳母にミルク酒を時々飲ませるのがよいと強く思う。そのミルク酒には砂や石を身体の外に排出させる薬草を煎じて入れておくのがよい。子供がある一定の年齢に達したら、結石に効く「ムラサキ」や「ユキノシタ」を入れたミルク酒を本人に飲ませるとよい⁽¹³⁾。医者は結石に薬効がある草木を多く挙げていて、私もその一覧表を作れるが、やはりその筋の専門家に任せよう。痛風にも同じ処置を取るとよい。それを治療するためには、鍛冶屋が鉄を急激に冷やすのと同じく、子供の足を水に浸すことを奨める⁽¹⁴⁾。その水には、杜松や月桂樹の実、それに「ニガグサ」や「キラソウ」の煎じ汁、そのほか明礬^{みょうばん}を混ぜ煎じる。その足湯はまた、含まれる成分で臍が頑強になるため、親譲りの中風にも効く。それには海狸香^{かいりこう}や龍涎香^{りゅうぜんこう}を用いてもよいが、必ず助言を必要とする。先祖譲りのより烈しい癩癩^{れんれん}持ちには脾臓に効く薬草を用い、「頭に起因する」癩癩に見舞われる者には、その病については、先に触れたように、確かに耳から膿を出し切り洗浄しさえすればよい⁽¹⁵⁾。手短かに言うと、両家に由来する病が何であれ、まず乳母にその乳が病気に効くような薬を与え、次に子供の年齢や体格を考慮して耐えられるような特効薬を投与する必要がある。この点についてはさらに多く語ってもよいが、それというのも薬草や植物それに樹脂の知識に、つまり博物誌に常に喜びを感じており、さらに薬種商に出向いた折、万人の病を見立てる目的で医者の処方箋が添付された明細を見るのを常としていたから。しかしながら、ほとんどすべての病に対する処方^{せう}に熟知しているとはいえ、子孫のために個々の病に関して処方することはせずに、専門医に委ねよう。繰り返しになるが、子孫らに遺伝的な病は幼少の頃に治すよう奨めたい。なぜなら、大人になってからでは、労多くして益なしだから。

子供が学校に上がると、教師に勉学をみてもらうばかりではなく、行儀作法を習う付添いを雇うべきだ。というのも、少年期に悪徳すべてがいと簡単に身に付いてしまうから。常に次のことが遵守されんことを願う。つまり、学校の教師が礼儀を欠く無作法を矯正し、逆に家庭教師が勉学の手拔かりを匡正することのないようにと。アルファベットを教わった後、簡略かつ簡明な文法書と、ギリシア語とラテン語の文字すべてが一つひとつ巧妙に説明された書とを与える。実例を示したその手の書物は、コメニウスである⁽¹⁶⁾。これが終わると、ローマではなくギリシアの著述家に進む方が

はるかによい。というのも、ラテン語よりギリシア語を先に学ぶ方がたやすく、子供の記憶にはありふれたものより希有なものを第一印象として与える方がずっとよいから。したがって、ギリシア語をまず子供に習わせたい。それもギリシア人が他の国民より優れていないか先陣を切っていないような学問はないから尚更だ。哲学や天文学それに数学や医学を見ても、またその他の全学問をざっと見渡しても、ギリシア人はすべての国民に凌駕している。大学に行く準備が整うと、行儀作法を教える家庭教師を付き添わせるとよい。若者は悪事を為すほど脆い質であり、彼らが齢を重ねて大人になるにつれて、行儀作法で箍をはめないといけない。若者は徐々に美德に慣れると、徳の醍醐味を知り、悪事に染まる以上に美德に喜びを覚える。なぜかという、誰もも有徳な人に惹かれるが、一方悪人同士は反発し合うものだから。この趣旨で、評判がよく厳格で学のある人々と付き合い、そのような人々の言葉に耳を傾け、行跡に倣うことが必要であり、決して勝手気ままで軽率な若者の例に倣ってはならない。青年期に身に付けるべきものがふたつある。ひとつは善性と礼節で、もうひとつは学問と知識である。それらふたつのうち後者よりも前者がとても大切である。常日頃に考えていることだが、美德は普通の分別が伴っていれば現世と来世の幸福につながるが、その一方で知識を詰め込み過ぎると自惚れが強くなり、その驕り昂った知識ゆえに悪事を為すいわゆる武器と優位な立場とが付与される⁽¹⁷⁾。それで残念なことに、邪悪な気質の持ち主は、悪意を研ぎ澄ます知識とそれを維持する勇気とを手に入れるのだ。人の善徳すべてを守護する堅忍不拔の徳には、よくない気質や激情それに悪徳から身を護る働きはない。諸兄には、大学で受講する通常の学科を奨励しない〔自由七科：文法・論理学・修辞学の三学科と算術・幾何学・天文学・音楽の四学科から成る教養課程〕。というのも、子弟を四、五年間そこで過ごさせるのが両親の意図だとしても、ある分野で修士や博士の学位を取得するつもりでその期間を過ごすのが落ちだから。その目的でチューター〔学生指導教師〕は、慣例として論理学の細則を教えるのに通常多くの時間を費やし、そのお蔭で成績優等者ぐらいにはなれるものの、また論理学は金銭目当ての弁護士には許容されるが、謹厳実直で礼節のあるジェントルマンにはとうてい奨められない。ただ、論理学でも、次の点は多いに推奨できる。つまり、不動の原理から論証を導き出す術を教え、虚偽と真実とを弁別する方策を示し、さらに誤謬や詭弁それにスコラ学者が似非論証と呼ぶものを見破る術を授ける点である。だが、それら三つの点については、ここで長々と議論するつもりはない。この目的に資する程度の論理学を身に付ければ、哲学全体をあらかじめ理解したことになり、そうすればプラトンとアリストテレス哲学の基礎を両方とも習得したのと同義である。その後、〔ペトルス・〕セウエリヌス（デー人）著『哲学的医術の理想』〔一五七一年〕を読むのも悪くないだろう。その書物には、これまでの著述家には見られないパラケルススの理念に関する重要事項が、数多く記されている⁽¹⁸⁾。また、通

例の逍遙学派を精査し論破したフランチェスコ・パトリッツィとテレシウスに目を通すのも悪くない。それらすべてを一年間で済ませる。思うにその期間で哲学は十分である。論理学は六ヶ月で十分である。普通の人間なら、そのふたつの学科から必要以上のものを即座に入手できるであろう、と確信する。これらに通暁したあと、地理学を精確に、それも世界のすべての国が置かれた状況を他人に教えられるくらい勉強すべきである。それとともに、国と国との利害関係や友好関係それに近隣諸国との力関係の他、政体や風俗習慣そして新旧いずれの宗教にも関わる事柄を学ぶのがよい。さらに、それと同時に天球儀の使い方を学ぶ必要がある。地理学と天文学とは、複雑微妙に絡み合っている。占星術の知識はたいして必要だとは思わないが、社会全体の動向を占うためだけに必要である。日月星辰の動きで個々の運勢を予め決めたり推測したりできない。算術と幾何学をある程度学ぶ必要がある。特に、算術は多目的に利用でき、とりわけ現世では帳簿付けに役立つ。線や平面それに立体の知識は確たる論証の術だが、築城の理解に用いなければ、ジェントルマンにあまり必要ない。けれど、その知識は戦争を企てる者には価値がある。覚えておいてもらいたい。築城術は防衛の際に力を発揮するが、それと同様に攻撃の際も敵を粉碎するのに役立つ。この術に多大な労力を費やしたが、未だに解らないことがある。敵が優勢を占める戦線で、想定される攻撃すべてを阻み打破する戦術や秘策がなければ、一体どこに堡塁や砦を築けばよいのだろうか。医学の知識をある程度身に付けることも、ジェントルマンには相応しい。特に、診断の分野における知識があれば、時宜に合った病気の発見につながり、それによって病気を未然に防げるかもしれない。また、予後を見る分野の知識があれば、病状の経過だけではなく、いつ峠を越すのかが解る。この医術があれば、ジェントルマンは多くの知識だけではなく信頼をも勝ち取れる。なぜかというと、病人を診れば、ほぼ確実にその病気で死ぬのかあるいは快復するのかが解るし、どのような徴候が現れどのような結末を迎えるのかも解るから。下剤や吐剤の成分だけでなく服用量も知る必要があり、また体質が特異であるのか、胆汁質や黒胆汁質それに粘液質のいずれの体液質であるのかを知る必要がある。瀉血〔^{しゃけつ}刺絡〕は多血症の人にのみ有効である。その上、ジェントルマンには自ら薬を調合する術を知り、自らの手で患者に与えてもらいたい。代用薬を混ぜるのが薬種商の慣例であり、調合薬の成分に舶来か入手困難な貴重品があれば本物の薬が配合されているのか判別できない。たとえ店に在庫があったとしても、その薬の使用期限が切れているかも知れず、つまり本来の効き目・薬効を保持しているとだれにも保証できない訳だ。私は医術をかなり勉強し、絶体絶命の症例に治療を施し、不思議にも成功を収めたことがある。二、三の例を挙げておこう。サットン〔ロンドン南部の地〕の召使いリチャード・グリフィスは厄介な悪性の熱〔発疹チフスカ〕に見舞われた。国中の医者が彼を診たが無駄だった。やがて尿が異様な悪臭を放ち、医者の見立てでは体温が異常に上昇して間もなく

命を落とす徴候であるという。彼を診てくれるように請われた時には、患者は六、七日間、何も飲まず食わず、しかも眠れず意識が朦朧としていた。医者に見放されたのかと尋ねると、さじを投げられたとの返答。私の指示した処方に従いある量のハシバミの実を与えてはどうかと提案した。この世の如何なる物も彼の病を治すことあたわずとも、ハシバミなら効くだらうと確信していた。その確信のもと、翌日午後四時に面会に行けば改善の兆しが見られること疑いなしだった。ただし、私の指示通り、堅果ひとつ分の大きさのものを服用していればのことである。やっとのことで喉を通したという。予定通り翌日の四時に面会すると、家族の者が驚いたことに、私がだれだか判るほど意識がハッキリと戻り、スープを所望した。ほどなく全快した。リウサエソン〔ウェールズ南部の地〕の親戚アレクサンダー・オーウェンは脳水腫を患い、頭から眼球が飛び出し口から舌が垂れ下がりはじめ、頭全体が異様に腫れあがる極限状態だった。同様に医者から見放された。利尿作用のある根を材料に、煎じ薬をふたつ処方してやった。それを飲み四、五日経つと尿が大量に出て、その結果、患者は頭が元の姿形に戻るなど健康を取り戻した。お礼の手紙を受け取った。彼の言葉通りに記すと、突然しかも完全に回復しました。治療というより奇蹟ですと。出血に悩むロンドンの貴婦人を治療したこともある。医師全員がさじを投げたが、簡単な薬で本人も驚くほど効果があった。この種の例は枚挙に遑がない。これで十分であろう。上記以外の症例に関して、身体の内と外すべての疾患、例えば潰瘍や腫瘍それに打撲や怪我などを治す処方^{いとま}を導き出す規範を披瀝したい。それには各国の薬局方^{やっまきよくほう}を参照するのがよい。その種の書物で書齋に納めているのは、ロンドン、パリそしてアムステルダム各都市の薬局方や、クルケタヌス、ボーデロン、レノデウスそれにヴァレリウス・コルドゥス各大家による薬局方、さらにケルン、アウスブルク、ヴェネツィア、ポローニヤそしてメッシーナの薬局方である。それらの書物のある箇所には、そこに記された処方が何に効くのかだけでなく、その服用量が示されている。ここに挙げる規範は、前述の薬局方が病の克服に効果があると定めるものすべてがよいということである。というのも、それらの処方^{いとま}は各国の権威ある医師が提示するものであり、その諸先生方の指示は必ず有効であるに違いないから。しかし、私の助言に従えば、アムステルダムものと呼ばれるあの小さな薬局方、それほど昔に刊行されたものではないが、その本の中に病氣や創傷などの治療に必要な情報のほとんどすべてが見出せるであろう。『医者^{いとま}の曙光』〔パラケルススの弟子ゲアハルト・ドルン著『自然科学者の曙光と財宝』〕という書物が、その類で読むのに最適である。医術関連の作家の中で、ヒポクラテスとガレノスに次いで、特にフェルネリウス〔仏王アンリ二世の侍医、ジャン・フェルネル〕、ルド・メルカトウス〔スペイン国王フェリペ二世および三世の侍医、ルイス・メルカード〕、ダン・センネルト〔ドイツ人医師、ダニエル・ゼンエルト〕そしてユリニウス〔オランダの医師、ヤン・ファン・ユルン〕を推奨す

る。さらに多くの名を挙げられるが、十分であろう。錬金術の薬剤については、子孫に使用を奨めない。吐剤や下剤や発汗剤から利尿剤に至るまで現存しているが、どれも植物由来のものと較べて安全とはいえず、満足できる訳ではない。もともと子孫には、指示をほんの少し与える程度にとどめ置くつもりであり、この点については、これで十分。話は変わって、植物学は立派な学問で、すべての薬草と植物の性質が解るほど、それに通じることはジェントルマンの素養のひとつだ。植物は人間に仕えるため、同じ造物主によって創られた同胞である。その趣旨で、本草の良書からすべての図版と効能書とを切り取り、英国に自生する植物と対置し、次に公道の傍らや牧場や河原それに湿地や小麦畑、さらには乾燥した山岳地帯や岩場や壁面や木陰などに生える植物と海辺で育つ植物とを選別するとよい。これを行なった後、先の図版を自ら携帯するか、あるいは召使いに持たせると、道すがら出会う薬草が何であれ、たちどころに判る。もし挿絵の花に彩色が施されていれば、尚更よい。その後、庭に自生する薬草かそれとも外来種か、つまり当地に移植された種かを区別するのも悪くない。英国の風土に耐えられない植物、それらの知識はジェントルマンに相応しく、それらの薬効も、特に医薬として薬屋に持ち込まれるとすれば学ぶ必要がある。だが、その薬屋が薬剤に混ぜものをして品質を落とす輩でない限り、それら帰化植物の挿絵は自生植物ほど、知るに値しない。だが薬屋がまがい物を使う場合、植物誌だけではなく、[コンラッド・]ゲスナーの薬剤誌と前述の『医者の曙光』に頼るとよい。それらの書物があれば、良薬か否か判別できる。これら薬草の多くは、ジェントルマンに有用であるばかりか心の慰めにもなる。如何なる道を歩もうとも、心和ませる野草を見つけられるから。同様に、解剖学を奨める。だれが何と言おうと、それを究めて無神論者になることはない。人間の身体全体の枠組みと諸部分の連結とは摩訶不思議で逆説的でもあるが、自然界最大の奇蹟であると思う。造化の女神が万物を創ったとき、人の心を魂の牢獄にしたと言われたくないため、人間の身体を病気ひとつ「留め針一本」に耐えられぬほど脆弱にしたとも思えないが。

前述の如く、人文の話があらかた終わり、諸徳と神学とに話を若干進めよう。諸徳に関しては、キリスト教徒も異教徒もある程度その定義は一致しているため、アリストテレスが倫理学で提示した定義から始めて不都合はないだろう。その大半はプラトン学派やストア派それに他の諸学派によって、また大まかには全世界の各国はおろかキリスト教会によっても追認された定義である。諸徳はそもそもはじめから魂しるしに刻印された教えであり、それにはこの世かあの世で至福に至る最第一の徴証しるしが具わっている。悪徳を賦与される者はひとりもない。その悪徳も自身の心の内と、どこか余所よそで教わる宗教や法律の両方において、あまり相違が見受けられない。敢えて言わせてもらおうと、有徳の人は世の宗教だけではなく法律すべてと確実に相通じるものがあり、如何なる障壁に遭遇しようとも、互いに行き来し会話を交わす人の輪にあって、心は

平安で満たされ、周囲から歓迎される。したがって、この美德を、この世で到達しうる最高の極致として、また来世で未来永劫にわたる幸福の証として、子孫に奨めよう。だれひとりとして最高神との合一を正当に望める者はない。というのも、いくら望んでも善徳と善行の点で、この世で神に近づけるはずもない。それで、もし人が弱さゆえに過ちを犯して神との合一が阻まれ、永遠の幸福を享受できないのであれば、心の底から悔い改めることにより、それらの過誤を贖った上で掻き消し、その他の点については我らの造り主にして救い主さらには守護者たる神のお慈悲にすがるのがよい。なぜなら、神は我らの父であり、我ら人間の脆弱さゆえに如何に惨めな状態であるかを十分ご存知であり、神威に背く意図なく犯した我らの罪を贖って下さり、それとともに御恵で我らの知性を矯正して下さること疑う余地などないから。一般的に我らが罪を犯す理由は、真善を仮象〔幻影〕と取り違え、眼前に現れる事象を誤って選択し欺かれてしまうこと以外にない。その点で、無窮の神威に背いたと告白することはすべての人間に相応しい行為であるが、さらによく考え直せば、神に背くつもりは毛頭なかった訳で、もし当人が本心から悔い改めていれば、神の義を満たすべく神が無限大の罰を科す正当な理由はない。ただ、当人が改悛しなければ、罪の程度に応じて少なくともこの世かあの世で一時的な罰が科される。悪意を以て軽蔑的な仕方であげ切れないほど神威に背けば、無限大の罰を蒙る可能性も否定できないが、天壤無窮の神に傲慢にも叛意を以て罪を犯すほど邪悪な人間がいないことを願う。そういう次第で、人が弱さゆえに罪を犯したら、最終的に改悛するか、(当人の言い分によると、魔が差した場合)神のお慈悲により正道に戻る努力をするか、あるいは可能な限りありとあらゆる善き手だてによって神と和解するか、そのいずれかであると信じる。このように、道徳哲学の学習と徳の実践とが人生で一番必要な知識であり有益な実践であると奨めたので、諸徳を実践する時でさえ、思慮・分別が如何に必要であるかを付け加えておこう。というのも、美德はすべて乱雑にはなく、時宜にかなった時にのみ用いるべきであるからだ。したがって、差し迫った危機がない折には、用意周到な分別は極めて有用だが、敵が刀を抜いたとき、毅然とした不屈の精神が最も必要になる。危険が差し迫っているとき、予防は後の祭りであるから。他方、女子供や無知な者から受ける不当な扱いには、毅然とした態度は役立つ機会がない。自分よりずっと位が上か高い者、つまり治安判事や行政長官などは言うまでもない。分別を以て自身に危害が加えられるのを避けるためであり、あるいは、物事が手遅れになったとき、平静な心で一方では権威、他方では弱さゆえに為された行為を我慢するためである。確かに、この手の人たちには、寛大な心が必要だ。他人を赦すことにおいては、私は人後に落ちないという自負がある。自身の体面や名誉に関わる時はいつでも、私ほど進んで身を賭する者はないが、体面や名誉のことで人を赦せる場合は、復讐をせず常に神の御手に委ねる。神は、私が敵を赦すと、その分を倍増して罰して下

さるから。この寛容の精神について、特に私の気を惹いた所見を三つ、以下に示そう。

一、他人^{ひと}を赦せない者は、渡る橋を自ら壊す者である。人はすべて赦されて然るべきである。

二、徳の亀鑑^{かがみ}に至る途上では、その足りない点が次のように補われる。他人の悪業を赦せば、紛れもなく自身の徳の完成に至る。したがって、その行為は、他人のお金で自分の借金を返すようなものである。

三、他人を赦すことは、すべての人が行なうべき必須の振る舞いである。その理由は、正義や愛それに賢明な行為を行なわなくとも、別のだれかが自分の代わりに行なってくれるが、敵を赦せるのは自分だけであるから。

これが常に寛容に努めてきた私の真意である。召使いや借地人それに隣近所ほどしきりに私を不快にする者はないが、彼らの所業を黙って見過ごすことで、少なくとも心に平安が保たれ、慰安が得られる。敵を赦した時ほど安逸を感じることはないとの底から言える。赦すことによって、多くの心配と心労から解放された。そうでなければ心悩まされたであろう。

そして同様に、このため諸徳の実践に関するもうひとつの規範が導き出される。つまり、慈悲が必要なとき、正義を振りかざしてはならない。それとは逆に、亀鑑が求められるとき、正義・正論より憐憫の情を優先するのは愚の骨頂である。それと同じように、節約と儉約が求められるとき、気前よく施してはならない。それとは逆に、散財が自分の地位や信用それに名誉に役立つとき、出し惜しみするさもしい輩は、ジェントルマンの風上にも置けない。そしてこの規範一般は、その場に必要の徳が機宜を得た適切な措置として常に湧き出るように実践すべきであるということである。したがって、知慮は全徳の心臓であり、全行動の各部に必要な生氣と鼓動を伝え末端を始動させる。不意の出来事に対して、真の知慮を正しく働かせて美德を行使する者はだれでも、あえて言わせてもらおうと、悪徳に頼らざるを得なくなることはない。そうすることによって、善徳はすべて実践されても徒勞となることはなく、問題の案件が適切に処理される。なかでも節制の徳は広く必要であり、その一部は少なくとも人間の行動すべてに不可欠な要素である。なぜかというと、目下果たすべき義務が他にある時に、礼拝に夢中になり過ぎるきらいがあるから。結局、善徳を学び、神の栄光とその奉仕に充てるのが、その主たる目的でもあり実践でもある。

あらゆる機会に自分の考えを雄弁にそして優雅に表現するため、ある程度の時間を修辞学や弁論術に費やすのがよい。いくらダイヤの原石を持っていたとしても、然るべき角度にカットし研磨したあと、それを引き立てる箔の上に置かなければ十分とはいえない。箔があつてこそ、ダイヤは本来の光沢を発し、色艶は一段と輝きを増すというもの⁽¹⁹⁾。同じように、人間に偉大な知性が具わっていたとしても、他人を説得す

るに際して、その知性を磨くだけではなく、修辞で得られる言葉の綾や比喩それに潤色で下支えしなければ十分ではない。決して気取った巧言令色を奨励する訳ではない。学校で教わる紋切り型の慣用句を多用することほど、術学的な趣味はない。そこに真実がないのではという疑念が払拭できないからだ。学校でよく言われることだが、修辞には推奨に値する有用な技法がふたつある。ひとつは、難しいことを解りやすく平明に言うことである。難解で込み入った案件が、確たる道理や首尾一貫性もなく示されたとき、それらの案件を解きほぐし再構築して理解できるように提示するのが、修辞の優れた点である。修辞のこの技法を皆に大いに奨める。物事を明確に明快にそして明瞭にすることを除いて、言葉の真の効用はない。その術を使わなければ、複雑にして不鮮明、なおかつ不明瞭のままである。

ふたつ目は、普通の事柄でも、当意即妙の機智を示し意表を衝く形で表現することである。巧みな節回しで臨機応変に語れば、多少とも常軌を逸したとしても、言葉に多大な活力と迫力が加味される。切れ味の悪い陳腐な言い回しをいくら操っても、粹いさというより野暮で、田舎の香水が漂うだけだ。だが、歯が浮くような美辞麗句は避けるべきだ。苦心惨憺の跡が窺われる凝った文章よりも、明快でさわやかな弁舌の方が自分の想いを伝えられる。これまで広く観察した結果、自分の演説を説得力があり明解な論拠で固める弁士は、月並みな修辞を弄して長広舌を揮う弁論家よりも聴衆の心を強く惹きつけられると言える。

支払ってくれる人物が疑わしい場合、ひととき光輝を放つ金貨ではなく、然るべき刻印のある銀貨を受け取るとよい。というのも、卑金属にメッキを施した恐れがあるゆえに。また、塗りたくった厚化粧より、肌が浅黒くても顔立ちのよい健康美の女性を選ぶとよい。

一般的な見解だが、頭のよさは返答に、剛勇さは防御に、一番よく表れるという。したがって、剣術では突きなどあらゆる攻撃から身を護る術を学ぶのと同じように、加えられる侮辱に対して、どのように言い返し対処するかを予め検討し対策を立てるとよい。そうしなければ痛撃を受け、急所を衝かれる恐れがある。アリストテレスは弁論術の書を著している。私の考えでは、聖哲がこの世に送り出した最高傑作に優るとも劣らない著作のひとつであり、それゆえ弁論家のキケロやクインティリアヌスとともに、話術の研磨に読むとよい。上記ふたりの演説は的確ではないと思われるが、[恋愛詩などに用いる]中の文体はわりと効果がある。私見では、キケロは冗長で退屈、クインティリアヌスは短く簡潔になるきらいがある。

このように道徳哲学に照らして、個々の行動すべてを律するのに必要な知慮と善徳とを手に入れたので、次に自分が暮らす王国や国家の公人として、あるいはその一員として、如何に振る舞うべきかを考える必要がある。さらに、政体が枠組みを与えられている拠り所や根拠を調べる必要がある。賢者が愚者を、強者が弱者をやすやすと

支配することは、自然の道理である。それで、知力と権力を手に入れる者が即座に統治者になれるであろう。その証拠に、国王が病床に臥す間はその侍医が国王を支配し、戦闘のとき老獪な將軍は国王を、自分が本来代役を務めるべき役職、つまり元帥（フランスの古風な言い方を真似るとコンスタブル）に任命することがある。また法律においては、判事は国王と国民のどちらが正しいかを裁定する限り、一応は国王に優っている。さらに神学においては、国王が良心の世話を委ねる聖職者は、その点においては国王に優っている。これらの事例から明らかなように、故意に我を通さない限り、多くの場合、賢者は愚者を支配し命令する。頑固に強情を張ると、従順が求められるのに、力づくで承知させることになる。

宗教に関して、手始めとして自分で見出せる中で最も確実に誤謬のない原理を端緒とし、そのあと次へと論を進めるのが最善の方策であると考えた。したがって、古代および当代で遭遇できるあらゆる宗教に、他の如何なる宗教からも疑義や不審を抱かれることのない広く遍く教化された項目や箇条があるか否かについて、これまで考察を重ねてきた。その結果、次の五項目・箇条だけが普遍的にして一般的であることが判った。

- 一、至高の神が存在すること。
- 二、神を崇拜すべきであること。
- 三、神に仕え神を崇拜する最高の諸方途は、神への信と愛に根ざし敬虔な徳行を積むこと。
- 四、己の罪を悔い改め、一途に神に帰依し正道に戻ることに。
- 五、現世と来世ともに褒賞と懲罰があること⁽²⁰⁾。

これらの基盤を自身で確立したあと、それに加えるべき項目や箇条を詮議した。ここでもまた、ある教会の威信や権威にのみ依存し、それら教会の間でも十分に意見が一致せず理路整然としない事柄が多く力説されているのが判った。さらに解明できたことは、あらゆる言語や国それに時代で為される論争を調べなくてはならぬが、その作業自体も留めどなく続き不可能である。その作業を怠れば、上記普遍五箇条を神に帰依する最も広く認知された方途であると言い続けるしかない。神は憐れみにより、ある時代や国で（尋常ならざる様々な方途により）、叡知や力業それに善行を明かされるであろうし、実際に啓示されたことを疑う訳ではない。したがって、この説に信を置き敬服するのが相応しいと思う。これらの教えの大半は、あらゆる宗派や教派の間で侃々諤々^{かんかんがくがく}と論争されはしたが、以前と同様、たとえ我々の手の届く範疇になく能力を超えたこのような諸問題を探求するのが我ら人間の勤めだとしても、私や他の平信徒の誰かが応分に吟味すれば際限のない作業となる。それゆえ第一義的には、普遍五箇条を固持しながら、それにもかかわらず生まれ育った国の教会〔英国国教会〕が公認する統一教義をすべて精一杯務めて信奉した。矛盾を一切包含しないものだけの特

段に異議も唱えず受け入れるため、いずこにせよ唱道される信仰箇条が如何なるものであれ、私の支持する宗教五箇条という台木に、それらが不可欠な枝葉末節としていつの時点で接ぎ木され癒着されたかは未だに解明の途上にあるが、論争の的を十全に考究する余暇や財力のある者がいれば、彼らにその論点の解明を譲り、また委ねよう。結論を申せば、以下の理由で自説の普遍五箇条にのみ執着する。

一、神の最高の属性たる普遍の摂理を確認するには、全人類に公布された明々白々たる方途はこれより他になかったこと。

二、前述の五箇条が然るべく解明されると、人を品行方正に善良にするものでその箇条に付け加えるべきものはないと判ったこと。

三、その箇条に付加された諸々の教説は、なるほどそれを信じる者には心地よく末頼もしくもあるが、すでに論駁されている。それも、如何なる人物といえども一生涯をかけて諸教説に含まれる込み入った難問を解決・解明するよりも、あるいは実際にその主題について書かれたかなりの冊数に及ぶ著作を読むより、論駁が容易である。しかも、その著作は、それらの書き物がなければ、教派すべての意見に耳を傾けたとも言えないし、十分な判断をも下せないという^{しろもの}代物であるが。

四、五箇条の確立に主に資する神秘や秘蹟それに啓示すべてが、その箇条を定立する、少なくとも主たる目的であると判ったこと。

五、善行を為し、善い言葉を口にし、善い想念を抱くことが、坐して瞑想に耽るよりも人生に不可欠な修行であることが判ったこと。

したがって、これら五箇条に固執する。それ以外のことは教会の権威に基づき信奉するか、あるいは立証が十分に為されず確認できないときは、少なくとも信仰心を以て疑う。しかしこの点においても、平信徒として他のものにはまったく規範を設けず、ただ信念の根拠を提示する所存である。}

《注》

- (8) 「幸運は勇者に味方する」(*Audaces fortuna juvat* / Fortune favours the brave) 古代ギリシア・ローマの俚諺的表現。*Audentes fortuna juvat* など類例が多い。ウェルギリウス「敢行すれば天助あり」『アエネアス』泉井久之助訳、全二冊(岩波文庫、一九八二年)、下巻、一七六頁；「幸運の女神は強者を助ける」柳沼重剛編『ギリシア・ローマ名言集』(岩波文庫、二〇〇三年)、一一六頁参照。
- (9) 後見裁判所で如何なる裁定が下ったのか不明だが、底本の編者シドニー・リーによると、エドワードの後見権を得たのは伯父のニューポートではなく、後にジョン・ダンの義父となるサー・ジョージ・モアであったという。Sidney Lee, *op. cit.*, p. 21n.
- (10) 結婚相手のメアリー・ハーバートは独身だったが、無垢の聖女ということもなか

ったようだ。やはり、同族のフィリップ・ハーバート（後の第四代ペンブルック伯）に求婚され、のぼせ上がり承諾したかに見えたが、熱が冷めて翻意したという。Tresham Lever, *The Herberts of Wilton* (London: John Murray, 1967), p. 62.

- (11) 釣りの指南書で著名な伝記作家アイザック・ウォルトンによると、エドワード・ハーバートは新婚でありながら、オクスフォードには四年間も母親と同居したという。Walton, *op. cit.*, p. 264.
- (12) イギリスでは、ハーバート卿が人生の大半を過ごした一五六〇年代から一六四〇年代まで、教育史上大きな変革がもたらされた。貴族やジェントリー階級の子弟がこぞって大学に入学するようになり、教育改革が声高に要求されたからだ。ローレンス・ストーン『エリートの攻防 イギリス教育革命史』佐田玄治訳（御茶の水書房、一九八五年）参照。また、ハーバート卿が自伝をまとめた一六四三年から四四年あたりには、ジョン・ミルトン『教育論』（一六四四年）やウィリアム・ペティ『W・Pによる学問の進歩のためのサミュエル・ハートリブへの助言』（一六四七年）、それにジョン・デュリー『学校改革論』（一六五〇年）などが刊行された。ミルトンのエリート教育論およびハートリブ・サークルのキリスト教的教育論については、以下の論考を参照。大倉正雄「初期ウィリアム・ペティの社会・経済構想（一）」『拓殖大学論集 政治・経済・法律』第十五巻第二号（二〇一三年）所載、二三-五六頁。
- (13) ハーバート一族の遺伝的な病を治す薬草がラテン語で列挙される。ただし学名ではなく、薬草名の特定は困難。ここでは、当時の本草誌 William Turner, *A New Herbal*, ed. George T.L. Chapman et al., 2 vols. (1551, 1562 and 1568; rpt. Cambridge, Cambridge UP, 1995) と John Gerard, *The Herbal or General History of Plants, The Complete 1633 Edition as revised and enlarged by Thomas Johnson* (1597; rpt. New York: Dover, 1975) にならい、併記された英語名から和名を付けた。以下、和名←英名（当時と現代で違う場合は併記）←ラテン名（ハーバート卿のと本草誌）←学名（ターナー版の編者による同定）、および典拠の順に挙げる。
- ・ムラサキ ← gromell / gromwell ← *milium solis* ← *Lithosperum officinale*. Turner, II, 429-31; Gerard, pp. 609-10.
 - ・ユキノシタ ← stone-break ← *saxifragia* / *saxifrage* ← *Silaum silaus*. Turner, II, 760-61; Gerard, pp. 567; pp. 603-05.
 - ・ニガグサ ← germander ← *chamaedrrys* ← *Ajuga chamaepitys*. Turner, I, 270; II, 562; Gerard, pp. 656-57.
 - ・キラソウ ← ground pine ← *chamaepitys* ← *Teucrium chamaetrys* or *scordium*. Turner, I, 271-72; Gerard, pp. 524-27.
- ウィリアム・ターナーは、イギリス植物学の父と称される。一九九五年のケンブリッジ大学出版局による現代版では、学名の特定がなされていて有益である。一

方、一五九七年に出版されたジェラードの本草誌は、人気を博したものの、オランダのドドエンズの翻案であるとの非難や誤植が散在するため、ロンドン薬種商組合の一員トマス・ジョンソンによって一六三三年に改訂版が出される。ジョンソンは一六三九年の夏、組合員を連れ立ちウェールズに植物採取に出かけた折、モントゴメリー城でハーバート卿から歓待を受けた。*Thomas Johnson: Botanical Journeys in Kent & Hampstead*, ed. J.S.L. Gilmour (Pittsburg, Pen.: Hunt Botanical Library, 1972), pp. 1-2; Sidney Lee, *op. cit.*, p. 31, n3.

- (14) 目的や用途に違いがあるが、哲学者で医者ジョン・ロックも「男の子の足を毎日冷水で洗う」ことを奨めた。『教育に関する考察』阿部知文訳（岩波文庫、一九九二年）、十八頁。
- (15) 「頭に起因する」と訳した原語は、*cephaniques* で、*OED* には項目としてとり挙げられていない。*cephalique (s) / cephalic (s)* の誤りであろう。
- (16) J・A・コメニウス『世界図絵』井ノ口淳三郎訳（平凡社ライブラリー、一九九五年）、特に、二〇-二七頁参照。
- (17) 「驕り昂った知識」(*puffed knowledge*) フランシス・ベイコンによると、神学者による学問批判のひとつは、知識に対する過度の欲望が人間の墮落を招いたことであるという。続けて、(一) コリント人への手紙(八：一)を引用しながら、「知識は人間のなかに入ると、人間をふくれさせる」(“it [over-much knowledge] entereth into a man it makes him swell, - *Scientia inflat* [knowledge puffeth up]. . .”)といい、神学者に対する反駁をお膳立てする。ベーコン『学問の進歩』服部英次郎・多田英次訳（岩波文庫、一九八三年）、十八頁／James Spedding, Robert Leslie Ellis and Douglas Denon Heath, eds., *The Works of Francis Bacon*, 14 vols. (1857-74; rpt. Cambridge: Cambridge UP, 2011), III, 264.
- (18) フランシス・ベイコン曰く、「*デシマーク*人セウエリヌスの筆によって雄弁に調和よく語られたテオフラストゥス・パラケルススの哲学、セレスウスとその弟子ドニウスとの、牧歌的哲学として良識に富んでいるが、たいして深みのない哲学(後略)」(同書、一八三頁／*ibid.*, III, 366)
- (19) 日本では、蒔絵などに金箔や銀箔を施し値打ちを上げる、いわゆる「箔を付ける」という慣用語がある。西洋の場合、宝石本来の輝きを一層引き立たせる、つまり価値を高めるという点では同じだが、金属を打ち延ばしたもの、つまり箔・フォイル(foil)を宝石の下に敷く点が違う。弟ジョージの詩「箔」(五-六行)では、引き立て役として使われる。「神は、綺羅星を 美德の引き立て役に、／悲痛を 罪の引き立て役に なされ給うた。」(『ジョージ・ハーバート詩集』前掲、三六五頁／George Herbert, *The Works of George Herbert*, ed. F.E. Hutchinson [1941; corr. rpt. Oxford: Clarendon Press, 1945], p. 176) シェイクスピアの『ハムレット』(五幕二場二五〇-五二行)では、フェンシング用の細身の剣(foil)と引き立て役の箔とが、地口として使用される。Shakespeare, *Hamlet*, ed. Harold Jenkins (London: Methuen, 1982), p. 409.

- (20) 自叙伝で提示される宗教に関する五つの共通概念は、このほか『真理について』（ラテン語，一六二四年；仏訳，一六三九年）や『異教徒の宗教』（ラテン語，一六六三年）や『チューターとその教え子との会話』（英語，一七六八年）それに『平信徒の宗教』（ラテン語，一六四五年；前出『真理について』改訂版に合冊）に登場して、微妙な言葉づかいの差はあれ、ハーバート卿の哲学・神学の出発点である。Edward Herbert, *De Veritate*, *op. cit.*, pp. 56-57; *Pagan Religion: A Translation of De religion gentilium*, trans. and ed. John Anthony Butler (Ottawa, Canada: Dovehouse, 1996), p. 52, p. 304; *A Dialogue between a Tutor and his Pupil* (1768; rpt. Bristol: Thoemmes Press, 1993), p. 7; and *De Religione Laici*, trans. and ed. Harold R. Hutcheson (New Haven: Yale UP, 1944), pp. 128-29. ジョン・ロックは、この世に生を受けたとき人の心は何も刻印されていない白紙^{タブラ・ラサ}だとする経験論の立場から、ハーバート卿の説く宗教の五つの共通概念が生得の原理として人間に本来備わっているかを吟味する。加藤卯一郎訳『人間悟性論』（岩波文庫，一九九三年），上巻，六三―七七頁。だが，二十世紀イギリスの学者R・ベドフォードによると，ロックは，ハーバート卿の宗教についての五項目を『平信徒の宗教』から引用し，しかもハーバート卿の主著『真理について』を読まずに議論を展開した可能性，および批判の矛先としてハーバート卿を名指ししながらも，ケンブリッジ・プラトニストというより，ルネ・デカルト一派を標的にした可能性を示唆する。Cf. R.D. Bedford, *The Defence of Truth: Herbert of Cherbury and the Seventeenth Century* (Manchester: Manchester UP, 1979), pp. 78-80.